

慶長元丙申年四月四日より同八日迄、山鳴、大に燒上る、八日午刻大石降落、人多く死す、數不知、
正保二年乙酉四月二十六日、大燒閏五月にあり

同四年二月十九日、大燒、

慶安元戊子年閏正月二十六日、辰刻大燒、古老の曰、此時大雪四尺餘、雪解けて追分驛流失すと云、
同七月十一日、大燒、同二年己丑七月十日、大燒、

承應元壬辰年三月四日、大燒、

明暦二乙未十月二十五日、卯刻大に鳴燒、

萬治二己亥六月五日、卯刻大に鳴燒、

寛文元辛丑三月十五日、大燒、同二十八日、大燒閏八月にあり

寶永元甲申正月朔日、大燒度々、同五年戊子十一月十八日の夜、江戸へ砂降、御檢使來る閏正月にあり
享保三戊戌九月三日、前欠山より、火山南岳江飛び、大に鳴る、

同六年五月二十八日、大燒、人拾六人死閏七月にあり

傳に曰、本庄のもの參詣のよし、

同八年癸卯正月朔日、大燒、同八月二十六日、大霜降作毛皆無

同十八年癸丑六月二十日、夜四ツ時大燒、黒野皆火になる、

寶暦四甲戌七月二日、大鳴燒、近國灰降、中にも佐久小縣一日煙地を這ひ、隴にして時を知らず、作毛痛れ、秋過迄度々燒、

安永五丙申七月二十三日、卯刻大燒、同六年、燒事度々なり、

俗に曰、閏有年登山せずと云傳ふ、先代大やけ、閏年度々有、

右古代の記録、委しくは他にあらんや、年をかくしるす、